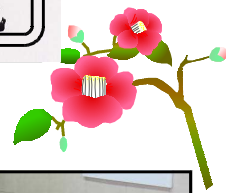


御陵の風

校長 西岡 浩一 （文責:教頭 藤井 浩彦）



御陵中「校訓」



◆第37代生徒会役員が決定しました！

11月16日、第37代生徒会の「会長」「副会長」「書記」「会計」を決める立会演説会及び投票が行われました。12名の立候補者が、短い選挙運動期間に、各学級のあたたかい応援態勢の中、一生懸命に自分の思いを伝えていました。

立会演説会当日、立候補していた12名は、本当に誰が選ばれてもいいぐらい素晴らしい演説の内容、意欲、堂々とした態度でした。中には、原稿をまったく見ることなく、前を向きすらすらと演説する生徒もいて本当に驚くとともに感心しました。立候補者の演説の中でキーワードだと思ったことは、

「凡事徹底」「誇り」「絆」「つながり」でした。どれも素晴らしいことであり、大切なことだと改めて感じさせてもらいました。

応援責任者の演説も素晴らしく、また、演説を聞く全校生徒の態度も大変よく、本当に立派な立会演説会でした。これからの御陵中学校がますます楽しみになりました。

そのあとの投票により決定した第37代生徒会役員は以下の通りです。

【会長】浜辺 祥希さん(2年) 【副会長】二宮 希読さん(2年) 柴崎 楓さん(1年)
【書記】池下 凜音さん(2年) 梅野 藍加さん(1年) 【会計】鈴木 莉央さん(2年)



【上:立会演説会 下:選挙運動】

◆何気ない朝の光景



左の写真、何かわかりますか？

生徒の皆さんは、もちろんわかっていると思います。校門付近で、毎朝生徒会役員の人たちが、落ち葉の掃除をしている光景です。ほうきを使っても取りにくいときは、腰をかがめ手で落ち葉を拾っています。生徒のみなさんは、いつもその光景を見て何を感じているのでしょうか？

「大変だなあ」「ありがたいなあ」「生徒会役員だから仕方ない」「何とも思わない」…

また、国旗と校旗は、朝、生徒会役員が職員室に取りにきて掲揚台に掲げ、夕方また収納する。これを毎日繰り返しています。突然の雨でも、生徒会役員が急いで収納してくれます。だからとても旗がきれいです。他にもそのようなことがたくさんあります。毎日毎日学校のために、みなさんのために、「見えるところでも」「見えないところでも」文句も言わず黙々と「当たり前にしてくれる」人がいるから御陵中は素敵な学校になっているのです。そんな何気ない日常の行動に気づき、感謝できる人でありたいと彼らを見ながら思う私です。みなさんは、どう感じるのでしょうか？

◆今後の行事予定

月	日	曜	行 事	月	日	曜	行 事
12	6	木	生徒会新旧交代式	1	18	金	新入生入学説明会
	7	金	3年生を励ます会(豚汁会)		22	火	私立高校専願入試
	21	金	2学期終業式		23	水	公立高校特色化選抜入試
	25	火	生徒会リーダー研修会		24	木	2年生職場体験学習
1	8	火	3学期始業式		25	金	2年生職場体験学習
	9	水	冬休み課題テスト		29	火	ガン教育学習
	15	火	代議員認証式		30	水	御陵中ブロック学習会[完全下校13:30]

◆本年度の卒業式：3月8日(金) 来年度1学期始業式：4月8日(月) 入学式：4月10日(水)

父が教えてくれたこと

今月2日、朝6時すぎ、私はいつも通り用意をして仕事に向かおうとしていました。妻が大変慌てた様子で「すぐ、お父さんの部屋に来て！」と私を呼びました。父の部屋へ行き、寝ていると思った父の口に手を当て息をしているか確認をしました。「えっ？すぐに救急車呼んで！」私は、大声で叫び父を起こそうとしました。まったく反応のない父を床に下ろし、心臓マッサージをしました。「目を覚まして！」と必死で叫びながら、胸の辺りを押し続けました。しばらくすると救急車のサイレンの音がして、救急隊の方が5名ほど入ってこられました。いろいろと聞かれましたが、私自身も冷静さを失っていたため、何を聞かれたかあまり覚えていません。とにかく救急隊の方々も必死で父の蘇生のための努力をされていたことは覚えています。救急病院に運ばれましたが、父は息を吹き返すことなくこの世を去りました。あっという間でした。信じられない現実戸惑いながら、様々なところへの連絡や対応、葬儀場との打合せなど、慌ただしく時間が過ぎていきました。

私の両親は以前、30年ほど商売をしていました。魚や肉、野菜、お菓子などの食品から衣類、燃料などを販売する「何でも屋」のような店でした。ほぼ、年中無休で、遊びに連れていってもらったりはもちろんでしたが、夕方帰ってくるとまた近所の人のためにと店を開けることもありました。父と母、支え合いながら田舎にある小さな店を切り盛りしていました。ですから、働く両親の後ろ姿をいつも見ることができました。もちろん、私も私の姉妹も盆休みも正月休みもないような状態で家の手伝いをしていました。小さいときは、お客さまに頭を下げる両親、遊びたいときに手伝いを「させられる」家がいやな時期もありました。しかし、だんだんと両親の偉大さ、そしてありがたさ、働くことの大変さ・素晴らしさがわかるようになってきたことを覚えています。

父が亡くなった日の夜、私は、自分の幼少期の頃からつい最近のことまでを思い出しては、悲しいやら寂しいやら悔しいやら、何とも言えない気持ちになりました。

小さいとき、かぶとむしと一緒にとりにいった父、姉が学校の授業で竹がいると言えぱすぐに竹を切りにいった準備してくれた父、私の妹とふざけて大笑いする父、大好きな車を朝早くからピカピカに磨く父、お酒の席で大好きな演歌を照れながら歌う父、母親と仲良く買い物に行く父、怒ると本当に怖くて近づけなかった父、私が働くようになって一緒にいった温泉旅行をととても喜んでくれた父、喉の手術をして痛みに顔をゆがめる父、私たちが好きだからと絶品の高菜の油炒めを作ってくれる父、最近になって、足腰が弱くなり倒れるとなかなか立ち上がれない父、それでもみんなで食事をしたりお酒を飲んだりすると「やっぱりみんな一緒だとおいしかねえ」と微笑む父、父の体を洗い、頭を洗ってあげると、「とても気持ちよかー。床屋さんより上手やんか。」と笑顔になる父…もってしてあげたいことがたくさんあったのに…と後悔の念が溢れ、涙が溢れてくるのでした。

父は決して上手な生き方ができる人ではありませんでした。一本気で頑固で、周りの方々にもたくさん迷惑もかけてきたと思います。しかし、情に厚く、自分のために力を貸してくれた人には全力でその恩義を返さなければという人でした。晩年、あんなにいつも強気だった父が、弱気になったり、愚痴ばかり言ったり…何より、父の背中を流しながら、昔はあんなに大きく感じていた父の背中が「え？こんなに小さかったっけ？」と思ったとき、私は父に、どれだけ心配をかけ、どれだけ支えてもらい、助けてもらい、叱ってもらい、励ましてもらい、深く大きな愛情で包んでもらってきたんだらうと感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

父が亡くなり、通夜、葬儀に来てくださった方をはじめ多くの方から、私はたくさんのあたたかい言葉をかけていただきました。命の尊さを感じ、そして私は改めてこう思いました。

私たちは決して一人では生きられない。たくさんの「おかげ」を受けて生きている。そして「生かされている」のだと。たったひとつのかけがえのない「命」を授かり、たった一度のかけがえのない人生を生きている。「かけがえのない」すべての人が、「かけがえのない今」を生きている。だからこそ、「今、このとき」を大切にしたい。出会うことができたかけがえのない人を大切にしたい。

そして願います…無限の可能性をもつ子ども達に、「今を大切に」「自分を大切に」そして「自分の周りにいる人を大切に」して、毎日を精一杯、自分らしく生きてほしい…と。